ある兄妹の雑談―――水族館―――

火水 風地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある兄妹の雑談――――水族館――――

【Ｎコード】
Ｎ３０３２Ｃ

【作者名】
火水　風地

【あらすじ】
ある兄妹の雑談。ちなみに三話目なのです。

（前書き）

久々に書いたのですが、ホラーの息抜きに書くのですが、一話、二話、がまあまあ以上だと思えましたら読んでも……ねえ、大丈夫かな、と。

ここは先月オープンしたばかりの水族館なのである。そう水族館なのである……

「あっ！　勝生、あれ見て！　ししゃもだよ、ししゃも！」

そう恥じらいもなく見当違いな言葉を並べたてている少女は、智華という名である。その智華に、混沌の塊のような、文句の尖った矛先を向けられている男は勝生……智華の兄である。

まあ、毎度この兄妹を観ているわけなので今更紹介の必要はないだろう。

「ふっ、馬鹿だな智華は。あれが、身体の七割卵でできてます魚、に見えるのかい？　だとしたら我が妹ながら見損なったよ。心底ね」

片眉を吊り上げ、大きなた溜息混じりにそう言う勝生だが、そんな事で実の妹を見損なうお前こそ見損なわれるべきだぞ。

「……あー、一応言っとくけど、さっきのはジョークだよ？　我が兄ながらホント馬鹿ね。もっと良い反応期待してたのに、これじゃあナイスな私が馬鹿みたいじゃない！？」

まあ、智華の【ししゃも発見】がジョークだったとしても、それはそれで随分ときついジョークだな。

「し、知ってたさ！　水族館にししゃもぐらい居ることくらい……」

「……馬鹿ね」

智華に同感。

「ところでさ、あの仕切りガラスって割れないのかしら？」

智華の眼前に映画のスクリーンの如く広がる仮想の海中を彼女は指差し、疑問を口にした。

「うーん、馬鹿で悪かったね」

勝生、それはいつの出来事の文句だ？　なんにしてもタイミング遅すぎるぞ。

「割れないのかしら！！」

「わ、割れないんじゃないかなー、そんなに軟なモノだったら水圧とかで、とっくにここら一面水深二十センチだよ」

心なし後ずさりの体勢の勝生は、それでも兄としての威厳を死守すべく心持強気にそう言った。

「五十はいくんじゃない？」

いや、ボケにボケで応えたら、無限のローテーションに陥りかねないぞ。まあ、智華はともかく勝生は真面目に言っているのかもしれないが。

「ふーーふぅ、やっぱり智華はおバカさんだなー。そんなに水深

があっちゃあ、鮫が自由に動き回れるようになっちゃうだろ。それとも智華は鮫のお腹の中を覗きたいのかい？」

「そ、それは……ごめんだわ」

「だろ？　まあでも、そんなことになってもきっと智華は大丈夫だよ」

「……なんで？」

「鮫のお腹の中でも元気に暮らせるよ」

赤色したオーラが智華の周りから……

――――――

――――

――

「……す、すイません……でシタ……」

周りの人々の視線など気にも留めず、智華は自らの拳を朱色に染め上げた。

「分かったならいいのよ勝生。でも、帰りにアイス奢(おご)ってね！」

そうして又してもこの兄妹は周囲の訝(いぶか)しげな表情の人々に、【微笑ましさ】をプレゼント……してないね。

IT CONTINUES

（後書き）

この場をお借りして、返信遅れてすいませんでした！

なんのことか分からんわ！　ってう人、スイマセン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3032c/

ある兄妹の雑談―――水族館―――

2010年10月17日02時59分発行